第四百七十八回　青葉会句会報　　句会：令和八年二月二十六(木)　十三時から
於：丸紅（株）本社４階会議室

選　者　川口孤舟
句会出席　柿崎忠彦　久米五郎太　後藤とみ子　在間千恵　佐藤ただしげ　豊田ゆたか
西澤國護　古田昇　星田啓子
投句・選句　川口孤舟　熊谷くにお　小早健介　田島正己　土谷堂哉　福島正明　古川百合子
山崎亜也　山田けい子　山内天牛　渡邊盛雄
選句のみ　伊賀山そらお　梅崎くすを　重枝孝岳　庄司龍平　高橋清子　橋口隆　早川允章
山本三恵

❖❖❖

【互　選　句】◎は孤舟選者の選　○は当該句選者の選で「天」

十点
尾道や坂の果てなる春の海　　堂哉　（○そ・く・健・た・ゆ・允・正・昇・け・天）

八点
◎朝の陽に光したたる軒氷柱　　百合子　（孤・くす・忠・千・た・孝・清・允）
蕗のたういのちを延ぶるにがみかな　　亜也　（そ・千・清・國・百・啓・三・天）

七点
大寒の弓極限に引き絞る　　孤舟　（く・と・己・堂・允・昇・け）

六点
◎雪解けに土の香りが蘇る　　忠彦　（孤・千・た・○正・百・天）
寒昴生涯消えぬ疵を負ひ　　弧舟　（く・孝・龍・百・啓・盛）
一灯に余寒のつのる武家屋敷　　くにお　（○くす・そ・孝・己・啓・け）
春寒し友好消えてパンダ去る　　千恵　（忠・た・隆・正・昇・亜）
裸木の先に落ちゆく陽の一瞬　　仝　（く・健・清・堂・百・○三）
◎自分史の秘めごと永久に山笑ふ　　盛雄　（孤・五・と・○龍・堂・百）

五点
◎春めくや紙面を飾る旅案内　　昇　（孤・清・己・亜・天）
人じゃないような人たち冬五輪　　天牛　（忠・○と・龍・堂・百）

四点
糶られゆく牛の耳標や寒の雨　　孤舟　（五・允・昇・亜）
万歩には足らぬ道のり草青む　　とみ子　（忠・五・昇・三）
ほうれん草赤根そろへて絞りをり　　仝　（くす・五・千・啓）
◎蜆汁滋味しみじみとわかる歳に　　仝　（孤・ゆ・國・○孝）
◎庭の柚子もぎたて香る夕支度　　國護　（孤・五・己・ゆ）
◎豪快に人気力士の鬼やらひ　　昇　（孤・忠・け・盛）

三点

にっぽんは水に浮く国初日の出　孤舟（くす・健・己）
鉄塔の列なりて越ゆ芽吹山　とみ子（五・亜・三）
◎鬼は外ひとりくちぱく豆撒く夜　千恵（孤・そ・三）
ふきのとう揚げたて分けて味噌合わせ　國護（た・ゆ・盛）
◎寒明けや本当に天下泰平か　正明（孤・堂・啓）
◎建国日皇紀の年を訊かれても　昇（孤・正・亜）
観梅や奈良万葉の香りして　仝（く・己・盛）
妹の認知すすむや冬銀河　百合子（そ・健・〇隆）
自販機の熱きボトルに暖をとる　仝（そ・千・〇昇）
春の陽の没するところやや北に　啓子（健・清・け）
メジロ来て歌舞伎化粧の似たるかな　仝（くす・正・け）
春めく日爪切り揃ふ何となく　亜也（と・龍・堂）
勝手口開けてびっくり雪景色　天牛（忠・國・隆）
◎凹凸の昭和は遠し菜の花忌　盛雄（孤・孝・天）

二点

◎春節に華人が来ない日本かな　忠彦（孤・隆）
青空の吐き出す春の小雪かな　くにお（龍・允）
トントンと朱肉を均す春初め　五郎太（千・亜）
侘助の小さき蕾の緩む時　仝（清・啓）
立春や留学する娘の晴れ姿　健介（と・隆）
浅春の車窓はるかに湖（うみ）光る　とみ子（くす・允）
早咲の菜の花満開富士望む　ただしげ（く・ゆ）
梅一輪静もる庭の紅一点　堂哉（ゆ・國）
包丁に一点の錆春夕べ　ゆたか（龍・啓）
梅林の花香愛でつつ酒を酌む　仝（國・盛）
降る雪や庭木の枝に雪の花　仝（國・隆）
薄氷を割らずに通る狭庭かな　けい子（ゆ・啓）

一点

草萌える犬も匂い嗅いでおり　忠彦（と）
俎に雪より白き蕪かな　くにお（三）
如月や小さき集ひの小さき宴　健介（〇盛）
雨上がり星煌めくや春塩飽　ただしげ（啓）
冬萌や老ひし母伏す家の庭　正己（啓）
薄氷に稚児の足跡目に眩し　仝（孝）
おいでやすと老舗の女将雪見酒　堂哉（正）
風吹かば日射しは足りず春寒く　國護（た）
皆老いて鳥見の会も冬ざれや　百合子（健）
一人居てベランダで聞く猫の恋　けい子（啓）

【選　評・短　評】※印は、点数は入っていないものの、気になる点など。

十点

尾道や坂の果てなる春の海　　堂哉

ただしげさん・尾道が坂の多い街であることを上手に表現している。

允章さん・・・昔、一度だけ尾道へ行ったことがあり、この景が想い出される。

昇さん・・・・広島県人の私には、千光寺から望む瀬戸内海の穏やかに広がる春の風景は懐かしい。まさに眼福。

八点

朝の陽に光したたる軒氷柱　　百合子

孤舟選者・・・朝日を浴びて融けた氷柱の水分が光となって滴る。

千恵さん・・・朝陽を受けて氷柱の表面が解けはじめそして光っている。それが「光したたる」なんですね。

ただしげさん・朝の冷たさが伝わるようです。

允章さん・・・私が子供の頃は温暖な小田原でもこんな景が時々見られたものだ。

蕗のたういのちを延ぶるにがみかな　　亜也

千恵さん・・・この苦みを味わうのは大人にとっては至福であり又それが長寿への道にもつながるかもと勝手に思う。

百合子さん・・歳を取ってよかったことの一つ、蕗の薹料理が好物になったこと。

啓子さん・・・蕗、延ぶる以外は全てひらがなを使われ春のたをやかさを表現。併せて古来の野草の苦みが和らいで感じられるほどにひらがなが効いているように思います。

七点

大寒の弓極限に引き絞る　　孤舟

とみ子さん・・寒稽古でしょうか。その場の空気の厳しさが　ひしひしと伝わってまいります。

堂哉さん・・・季語で緊張感が一層！

允章さん・・・緊張感の漲る景が見える。

昇さん・・・・酷寒の中、キリキリと弓を引く張り詰めた緊張感。筋肉の躍動も目に浮かぶ。

六点

雪解けに土の香りが蘇る　　忠彦

孤舟選者・・・長い間雪の下で眠っていた大地が顔を出した。

百合子さん・・北国に住む友人が、雪解けの時の感動をよく語っています。

寒昴生涯消えぬ疵を負ひ　　弧舟

龍平さん・・・静謐な空間での深い思索。感銘です。

百合子さん・・私の疵は、年月とともに人生の深みと思えるようになりましたが・・・

盛雄さん・・・大変な目に遭った作者。早い日の回復を待っています。

一灯に余寒のつのる武家屋敷　　くにお

啓子さん・・・歴史的風致地区でしょうか、街の一角の武家屋敷跡にぽつんと灯がともっているが、春まだ浅き夕暮れ、余寒がつのり襟をかき寄せながら歩く作者。昭和の初期白黒映画の一コマのよう。

春寒し友好消えてパンダ去る　　千恵

ただしげさん・日中友好の危うさが良く理解できる。

隆さん・・・・パンダが消えた。宝塚男役宰相から国民に一言欲しい。

昇さん・・・・賃借期間が切れ、友好のシンボルと称された上野や白浜のパンダも中国に返還された。現首相の発言に端を発した外交上の友好関係の種々の軋轢が懸念される。

亜也さん・・・この言葉自体そもそもちょっと押し売りだったかも。唇寒しという言葉をふと連想

※五郎太さん・・私の周りでは日中協力の事業が進んでおり、中七「友好消えて」には引っかかるものがある。「いつか再見ツァイチェン」とか、少し余情がほしい。

裸木の先に落ちゆく陽の一瞬　　千恵

堂哉さん・・・真っ赤な冬の夕陽が目に浮かんできました！

百合子さん・・光景とともに、詠み人の一瞬の表情まで浮かんできました。

三恵さん・・・一見、枯れてしまった樹木が陽の光で芽吹く予感が…。命の再生の瞬間を「激写」に感動。

自分史の秘めごと永久に山笑ふ　　盛雄

孤舟選者・・・「秘め事」と決めたことは、墓まで持ってゆくことだ。

五郎太さん・・決して漏らさないと思う秘めごと、春めく山を眺めているとそんなに力むことはないのかもしれない。

とみ子さん・・どのような秘め事でしょうか？　山が笑う程度でしたらさほどの事ではないと推察しました。

龍平さん・・・山笑うが妙に引っ掛かり面白い！秘す要無しでは？

堂哉さん・・・季語が利いてますね！

百合子さん・・山笑ふ　青春の日の？　あたたかい秘めごとと了解しました。

五点

春めくや紙面を飾る旅案内　　昇

孤舟選者・・・活動的な春を迎え、国内外ツアーの広告が増えてきた。

亜也さん・・・たしかに旅心が唆られます。新聞の中にも春を見つけるセンスに敬服。

人じゃないような人たち冬五輪　　天牛

とみ子さん・・スノボーの宙返りなど　正にそう感じました。

龍平さん・・・その通りでした。一体どうやって練習するの？

堂哉さん・・・ハーフパイプ始め本当に驚きました！

百合子さん・・まさしく同じ感慨をもって観戦していました。

四点

糶られゆく牛の耳標や寒の雨　　孤舟

五郎太さん・・大事に育ててきた牛を糶りで売る、これからはきみは記号で呼ばれる。寂しく、涙の冬の一日。

允章さん・・・何とも侘しい景が見える。

昇さん・・・・糶り落されてゆく牛の悲痛の表情が伝わって来る。食の安全を管理するために必要な耳標は、牛の厳粛な運命を暗示している。

亜也さん・・・トレーサビリティの一言からこぼれ落ちる別れの思い。糶の字で競りという場を連想させ、耳標という業界用語も取り混ぜて巧み。

万歩には足らぬ道のり草青む　　とみ子

五郎太さん・・かなり歩いて疲れました。だけど、一万歩にはいかない。草青むが生きています。
昇さん・・・・さほど遠くない道のりのさり気ない風景描写の中に季節の移ろいの小さな発見や大きな感動を見る。

ほうれん草赤根そろへて絞りをり　　とみ子

五郎太さん・・茹でると赤が際立つ根の部分も食べるのですね。
千恵さん・・・根の赤い新鮮なほうれん草、お浸しもきっと美味でしょう。
啓子さん・・・日常のふとした景を瞬時に捉える目と感性が見えるようです。

蜆汁滋味しみじみとわかる歳に　　とみ子

孤舟選者・・・「し」「じ」のリフレインが心地よい。
孝岳さん・・・蜆汁のような地味な食べ物を深く味わう歳になったのだなあと、感慨に耽っている様子が面白い。韻を踏んでいるのも楽しく感じた。

庭の柚子もぎたて香る夕支度　　國護

孤舟選者・・・採りたての新鮮な柚子を早速夕食の食膳に。
五郎太さん・・柚子は色々な料理の隠し味、ふゆのお鍋にもかけらを入れる。羨ましい景です。
※句会にてご意見あり・・柚子の季語は晩秋です。

豪快に人気力士の鬼やらひ　　昇

孤舟選者・・・人気力士は強い鬼役に相応しい。
盛雄さん・・・成田不動。新勝寺の景でしょうか。力士の暴力はイケマセン。

三点

につぽんは水に浮く国初日の出　　孤舟

鉄塔の列なりて越ゆ芽吹山　　とみ子

五郎太さん・・送電線が列となり、山を越えていく。こうした人工物に対比するような草木の芽吹、芽吹山の措辞に感心しました。
亜也さん・・・むかし調べた送電線の技術書の中で、鉄塔の写真のキャプションに「勇姿」とか「威容」とか思い入れのある言葉が入っていたのを思い出しました。

鬼は外ひとりくちぱく豆撒く夜　　千恵

孤舟選者・・・ご近所への手前、発声は控えめに。
※句会にてご意見あり・・・「鬼」と「豆撒く」は季重なりです。

ふきのとう揚げたて分けて味噌合わせ　　國護

ただしげさん・美味しそうな香りが漂いそう。
盛雄さん・・・ＴＶの料理番組を見る様な愉しい佳句。

寒明けや本当に天下泰平か　　正明

孤舟選者・・・暦の上では寒明けだが、世間に本当に春が来たのか。
堂哉さん・・・とうとうテヘラン攻撃！ニューヨークには届かないのかな？
啓子さん・・・まさに地球丸ごと不穏な空気に。疑問符のついただけ句で時事句になるのですね。

建国日皇紀の年を訊かれても　　昇

孤舟選者・・・私は「皇紀（紀元）２６００年生まれ」と聞かされてきた。
亜也さん・・・昭和15年が皇紀2600年。そこまではいいとして計算だけでも大変、ましてや…。

妹の認知すすむや冬銀河　　百合子

隆さん・・・・後先も確約できない現実の厳しさ。

自販機の熱きボトルに暖をとる　百合子

千恵さん・・・大げさっちゃ大げさですが、冷えた指先には嬉しい。

昇さん・・・・冷え切った体に生気が甦る。暖を取るの措辞が大袈裟に感じない。寧ろ効果的で楽しい句になった。

春の陽の没するところやや北に　啓子

健介さん・・・日の出日の入りがはるか最南方向から少しずつ北へ移ってくると、地上では待ちかねた春の訪れを感じられるようになりますね

勝手口開けてびっくり雪景色　天牛

隆さん・・・「開けてびっくり玉手箱」潜在意識か。「勝手口扉ひらけば雪景色」でも。

春めく日爪切り揃ふ何となく　亜也

とみ子さん・・何となく　と結んでおられますが、お出掛けとか　これから何か楽しいことのあるような気がしました。

龍平さん・・・気分が自然に為せる技ですかね？

堂哉さん・・・下五で老人ののんびりした、平和な雰囲気を感じました。

凹凸の昭和は遠し菜の花忌　盛雄

孤舟選者・・・確かに昭和は激動の時代だった。

二点

春節に華人が来ない日本かな　忠彦

孤舟選者・・・渡航制限の影響。よい事か悪い事か。

隆さん・・・・説明は避けたい。時事句へのチャレンジはいいですね。

「春節に華人の消えぬ銀座かな」でも。

青空の吐き出す春の小雪かな　くにお

龍平さん・・・〝吐き出す〟が生きています。

允章さん・・・青空なのにはらはらと雪が降る。懐かしい景色だ。

トントンと朱肉を均す春初め　五郎太

千恵さん・・・至近距離のの世界に焦点を合わせたところが面白い。〝トントン〟も効いてます。

亜也さん・・・書に落款？

侘助の小さき蕾の緩む時　五郎太

啓子さん・・・侘助はほかの椿より幾分遅れ二月あたりから咲きます。下五の「緩む」とした表現が花の姿を思わせて。

立春や留学する娘の晴れ姿　健介

とみ子さん・・晴れやかに希望に満ちておられる様子を、立春で尚更と思いました。

隆さん・・・・「娘」は「こ」と読ませるのでしょう。「子」「児」でもいい。想像が膨らむから。

浅春の車窓はるかに湖（うみ）光る　とみ子

允章さん・・・明るい春の景色。

降る雪や庭木の枝に雪の花　ゆたか

隆さん・・・・季重なりは避けたい。久しぶりに私も同じ光景に感動した。

「夜半から静かに積もる枝の雪」でも。

薄氷を割らずに通る狭庭かな　けい子

啓子さん・・・庭の水たまりが凍っていたのでしょう、おや、とちょっと嬉しくてよけて通ります。

一点

草萌える犬も匂い嗅いでおり　　忠彦

とみ子さん・・中七を「犬も匂いを」としていただきました。何となくユーモラスなあるあるの景ですね。

雨上がり星煌めくや春塩飽　　ただしげ

啓子さん・・・瀬戸内の景。塩飽方面の雨が上がり同時に風で雲は払われ星が煌めく夜となった。

風吹かば日射しは足りず春寒く　　國護

ただしげさん・立春は過ぎても風の冷たさがよく分る。

一人居てベランダで聞く猫の恋　　けい子　　（啓）

啓子さん・・・珍しくふと暇になった一瞬。普段は忘れている寂しさがこんな時に顔を出す。

（俳句の部　了）

❖❖❖❖❖❖❖

次回句会ご案内

第四百七十九回　青葉会開催

日時：三月二十六日（木）※第四木曜日　十三時～

於：世田谷区施設　三軒茶屋しゃれなあど　6階　ビーナスの間

※ご出席ご予定者は5句、ご投句の方は2～3句　を　三月二十一日（土）中までに編集担当（星田）宛お送りください。

FAX：03・3421・9772　※スマホメッセージでもお受けできます。

※句会当日に選句表をお送りいたします。選句締め切りは概ね十日後と致します。

次々回句会ご案内

第四百八十回　青葉会　　日時：四月二十三日（木）※第四木曜日　十三時～

於：世田谷区施設　三軒茶屋しゃれなあど6階ビーナスの間

※ご出句（ご出席5句、ご投句2～3句　を4月十八日中までにお送りください。

§§§§§§§§§§

【青　葉　会　報】

一、今月は、孤舟選者から選句のみならず、ご投句もいただくことが出来、お体調も復調の兆しかと嬉しい思いと共に編集にあたることが出来ました。

二、また久しくお休みをされていた伊賀山そらおさんが今月ご復帰です。有難く存じます。

三、先月の古田昇さんの朝日新聞、俳壇でのトップに続き、関西から朗報が届きました。伊丹の渡邊盛雄さんが、毎日新聞「兵庫文芸」欄で、「特選」を獲得されました！これまでも何度も毎日新聞の俳壇ではご入選、特選に連なる盛雄さんですが、年明け東西続いての快挙のお知らせは幸先よく、青葉会として何とも嬉しく有難く、誇らしい想いがいや増します。誠におめでとうございます！

二月二十一日毎日新聞　兵庫文芸「特選」

一病連れ泰然と生き日向ぼこ　盛雄

・・・兵庫文芸選者　若森京子選

【孤舟選者近詠】

みづうみは寂しき器鳰潜る

絵本より抜け来しやうな熊であれ

人の世に句読点あり除夜の鐘

大泣きの子になまはげの鎮まりぬ

寒椿落ち大山の鳴動す

・・・爽樹誌３月号掲載

【関係者近詠】

白菊や遺影に届く感謝状　眞希子

秋天を仰ぎ陽気な寡婦たらん　仝

教会の民家に紛れ枇杷の花　仝

人の死は久闊に似て草紅葉　仝

石蕗咲きてその葉食む蟹住み着きて　仝

・・・横澤放川選　森の座二月号「花樹の道」欄

・・・安部眞希子様のご主人様が昨年十月にご逝去されました。紙上でのお知らせが遅くなりましたが衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

そのためしばらく本欄の眞希子様の句もお休みしておられましたが、今回からまた頂戴できることとなりました。

珈琲と「寒雷」初版長き夜　弘子

進学校の静かな下校蔦紅葉　仝　※「盛樹の歌」欄　今月の推薦句

陵と知るや知らずや鵙の声　仝

実の冬をたんと掲げて藪茗荷　仝

小溝中細き葉ながらも冬菖蒲　仝

茶の花の散り継ぐ午後やすずろはし　仝

店の灯へ白根括れる冬の芹　仝

・・・横澤放川選　「森の座」二月号

ひねもす炬燵忙しなき世は扉（と）の向かう　青史

日向ぼこ世事に三猿決め込んで　仝

見ぬふりの急ぎ立ち去る神奈月　仝

くさめ三度誰か私を撮んでる　仝

冬あたたか枕に笑ふ昼の寄席　仝

意に染まぬことはせぬ齢三島の忌　仝

余生寒しゴール地点はまだ先か　仝

・・・横澤放川選　「森の座」二月号

令和八年三月十日

了